

妙高でエビ生産のIMTE

屋内養殖の技術世界へ

環境負荷、病気リスク減

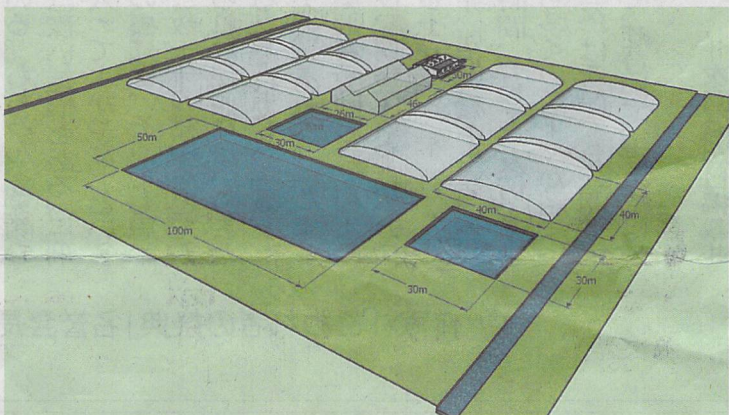
ベトナム企業へ提供合意



妙高市でバナメイエビを屋内養殖しているIMTEエンジニアリング(IMTE、東京)は、ベトナムの水産会社と屋内養殖技術の提供で合意した。IMTEは今後、環境への負荷が小さい同技術の引き合いが増えると考えており、自社の技術を広めたい考えだ。

IMTEは2007年、妙高市の企業が行っていたエビ養殖事業に技術協力として関わり、14年に経営を譲渡された。同市で生産されたエビは「妙高ゆきエビ」

「屋内型完全閉鎖循環式エビ養殖システム」があるIMTEエンジニアリング妙高事業所
妙高市



IMTEエンジニアリングが技術協力して整備するベトナムのエビ屋内養殖場のイメージ図(同社提供)

のブランド名で年約14ト出している。IMTEは、国の研究機関などと共同開発した「屋内型完全閉鎖循環式エビ養殖システム」(ISPS)を採用。屋内に設置した水槽で養殖するため気候の影響を受けにくく、病気になるにくい。飼料の残りや脱皮殻などの沈殿物を自動排出、水を浄化して循環させる。

ベトナムではエビは主要な輸出品で、国家プロジェクトとしてエビの養殖を推進している。ただ温暖な中南部の熱帯林を切り開いて池を作り、そこで養殖するケースが多く、熱帯林の減少や水質悪化による環境汚染が指摘されている。

そこでベトナム政府と国の水産会社ハロン・トレディング・フィッシュヤリは環境負荷が少ないISPSに着目。IMTEは1月、ハロン社への技術協力で合意した。

今月、IMTEの技術者2人が現地調査した上で、稚エビの飼育にISPSを導入する方針。稚エビの飼育以外のシステムについては妙高市のISPSをそのまま導入するのではなく、メンテナンス体制など現地の事情を考慮した低コストの「ベトナム版ISPS」を構築する。約10年かけて、約11畝の敷地に養殖工場などを順次整備する計画だ。

IMTEの野原節雄技術顧問は「安心安全な水産物を生産できる屋内養殖が世界で求められている。妙高で10年間蓄積したノウハウを生かし、持続可能な屋内養殖システムを国内外に広めたい」と話している。